

カワムチ



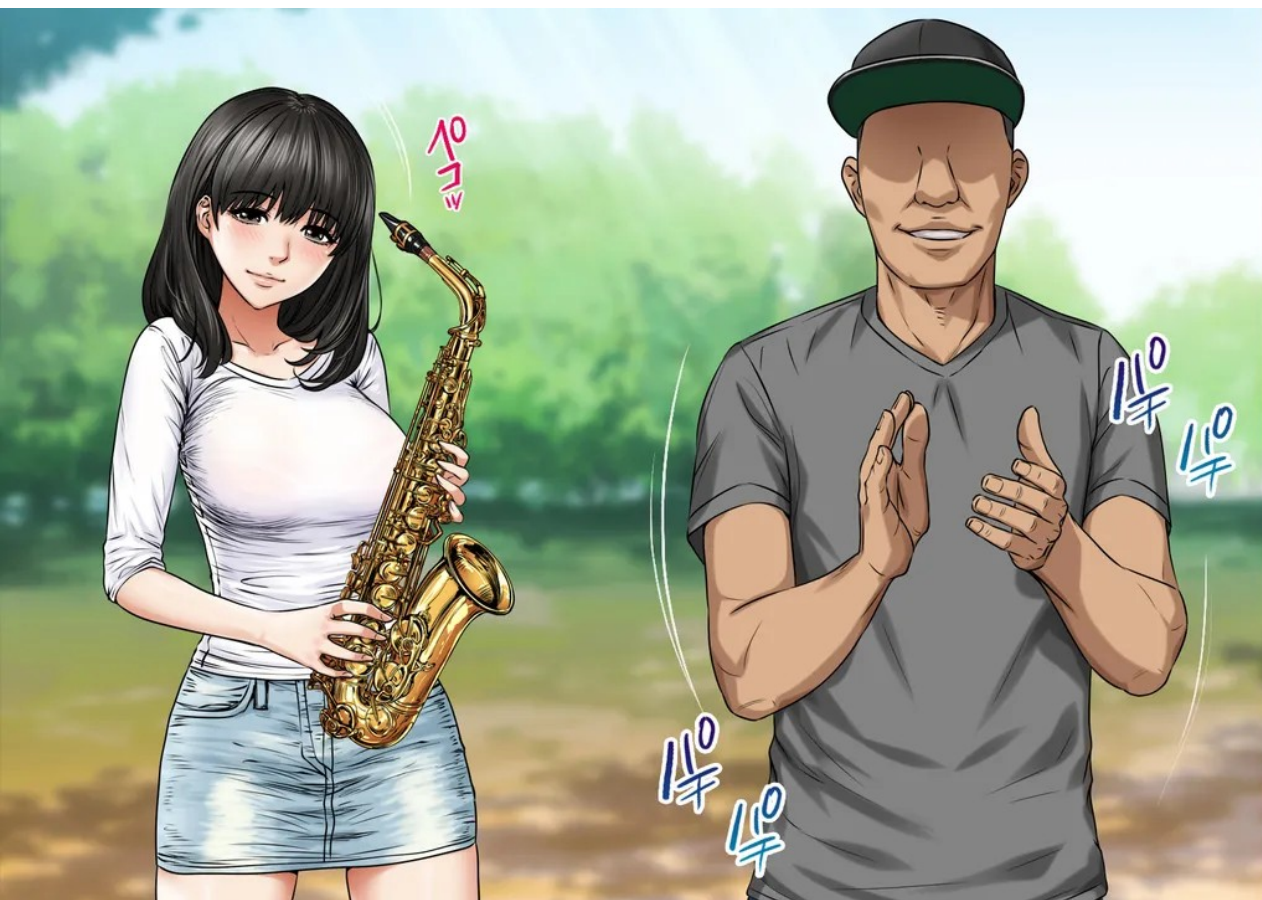
世間知らずの娘
サクソ編

こんの
みき
『紺野 美樹』

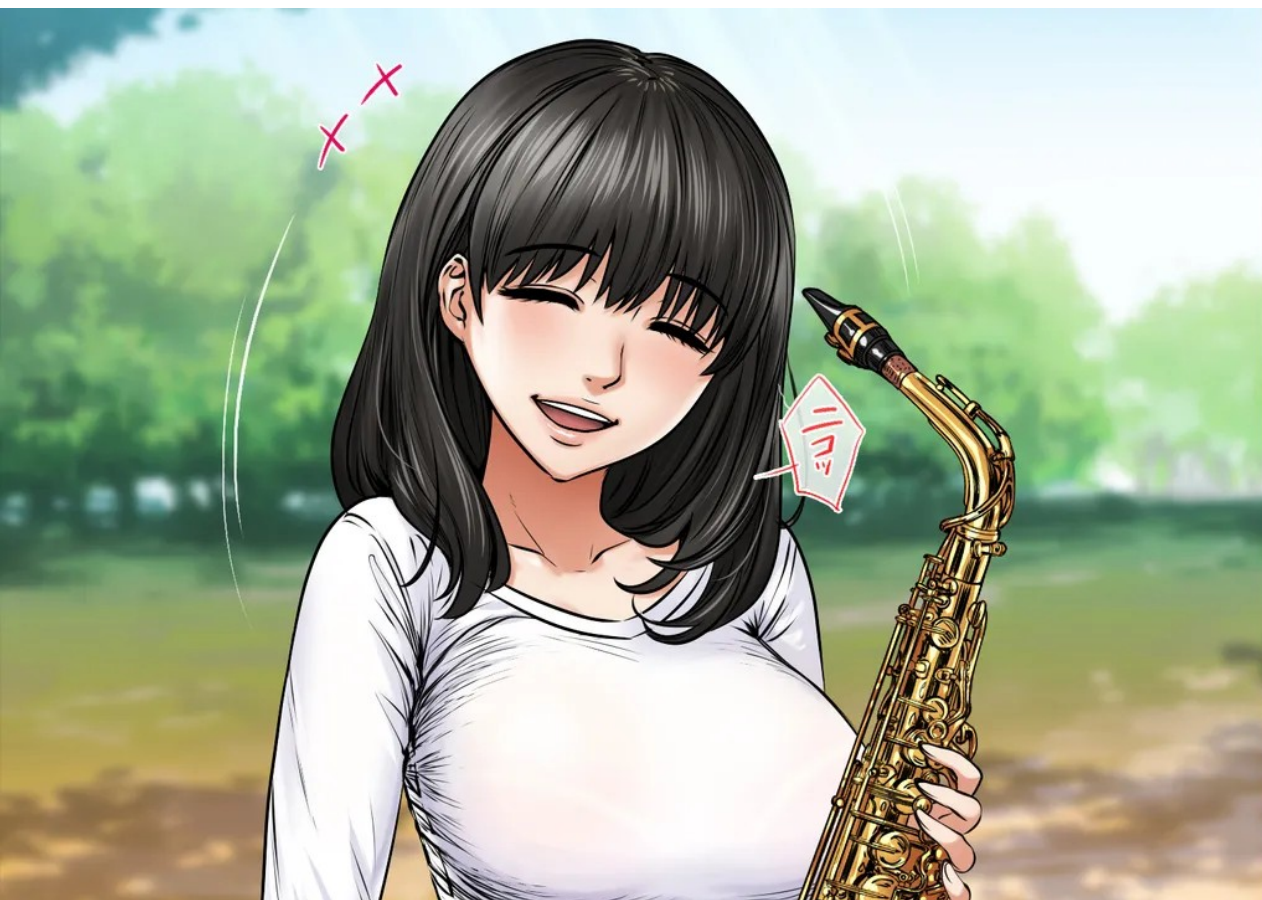
両親の期待を一身に受け、有名な進学校に通う。
勉強ばかりの日々の中でサックスに出会い、
その魅力に魅了されてのめり込んでいく。



両親はそんな美樹をよく思わず、受験が終わるまで
サックスを禁止すると言いつ出した。
耐えられなくなった美樹は反発し、愛用のサックスを手に
家を飛び出していきつけの公園へと避難する。



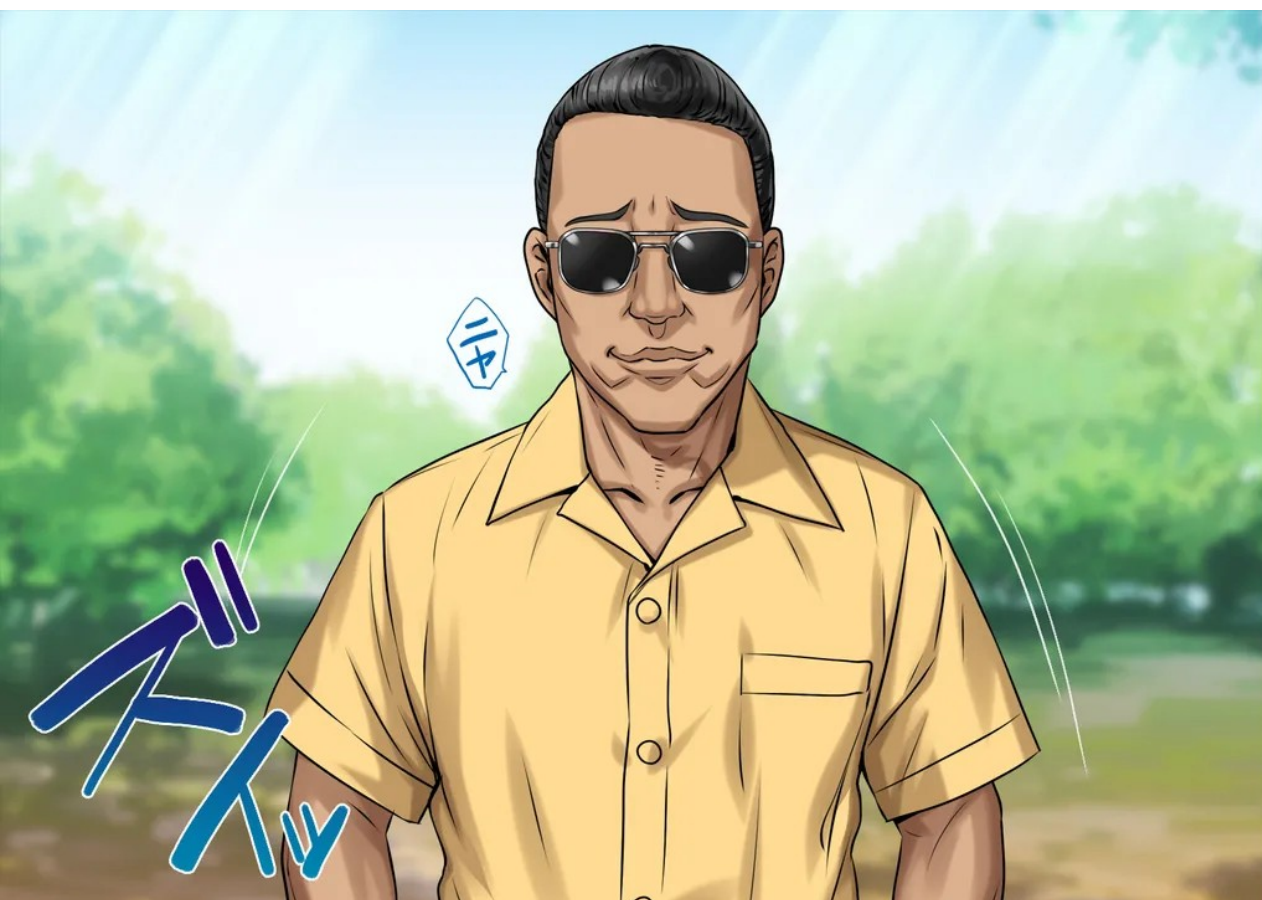
「ご清聴ありがとうございました。」
いつものように公園で小さな演奏会を終わらせ、
美樹はニコリと微笑んだ。
パチ。パチと拍手がまばらに起こる。



「また聴きに来てくださいね。」
少数とはいえ、自分のサクスを聴いてくれる人が
嬉しくて、美樹に笑顔が浮かび上がる。



「いやあ、よかつたよ！
まさかこんなところに原石が眠っていたなんて！」
「えっど…」
突然声をかけられた美樹は戸惑いから不安な表情になった。
男はお構いなしにズカズカと近寄ってくる。



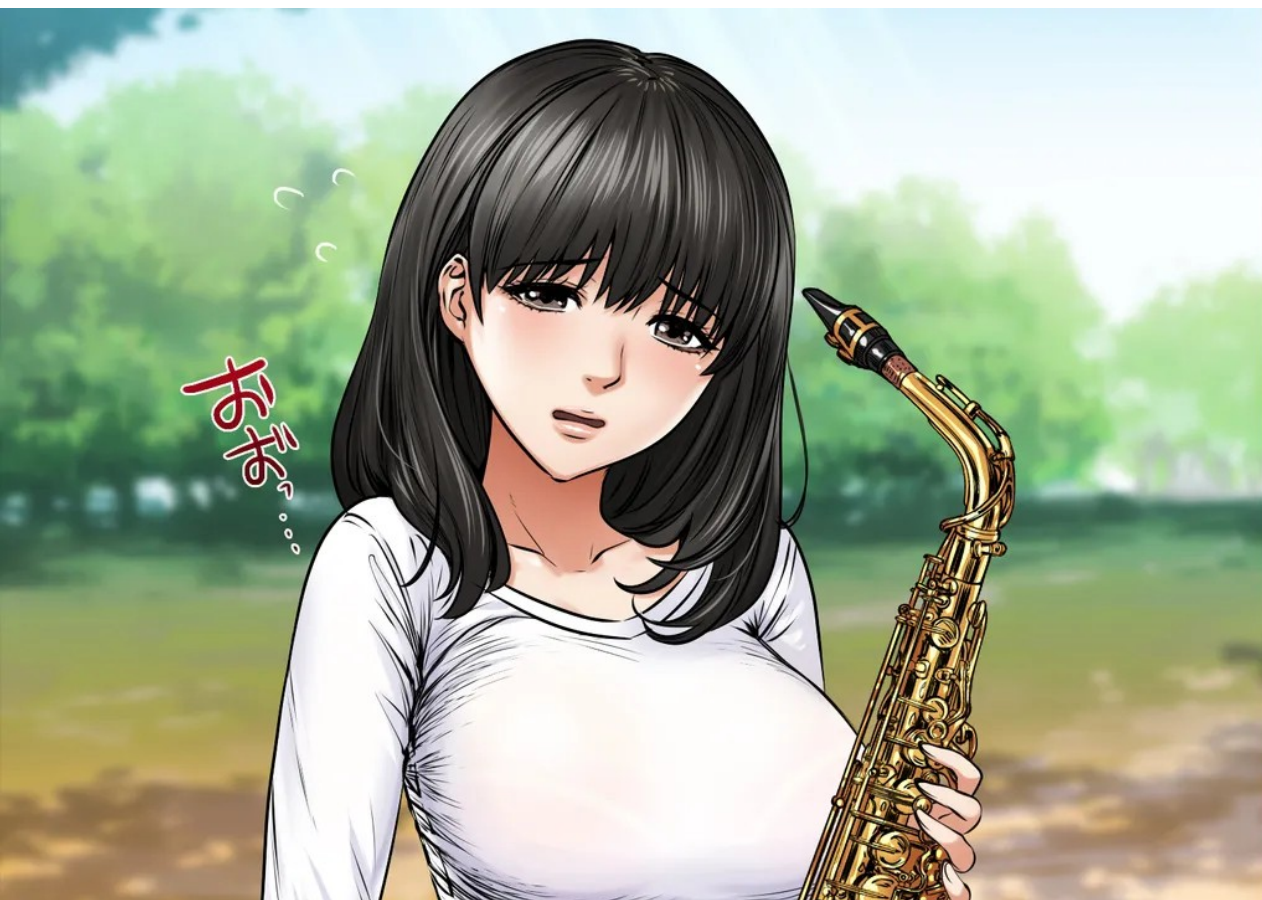
「おっと、これは失礼。実は俺も音楽をやっている身でな。たまたま通りがかったらサックスの音が聴こえてきた。」
美樹の緊張をほぐそうと、興味の引きそうな話題を語りながら更に距離を詰める。



「そうだったんですね！」
「君は中々筋がいい。音楽を楽しんでるのがよくわかるよ！」
「本当ですか！」
「もしよかったらプロを目指してみないか？」
男のサングラスがキラリと光った。



「え、そんな私なんか……」
「なんかとか言っちゃダメだよ！君には可能性がある。」
少々強い口調で男は語った。
美樹はその熱意にタジタジになりながらも内心嬉しかった。



「お話はとても嬉しいんですけど
その…親が許してくれないので、このお話はなかったじやない…」
美樹の言葉は明らかかな不本気な意思が見られた。
声がすこしずつ小さくなっていく。

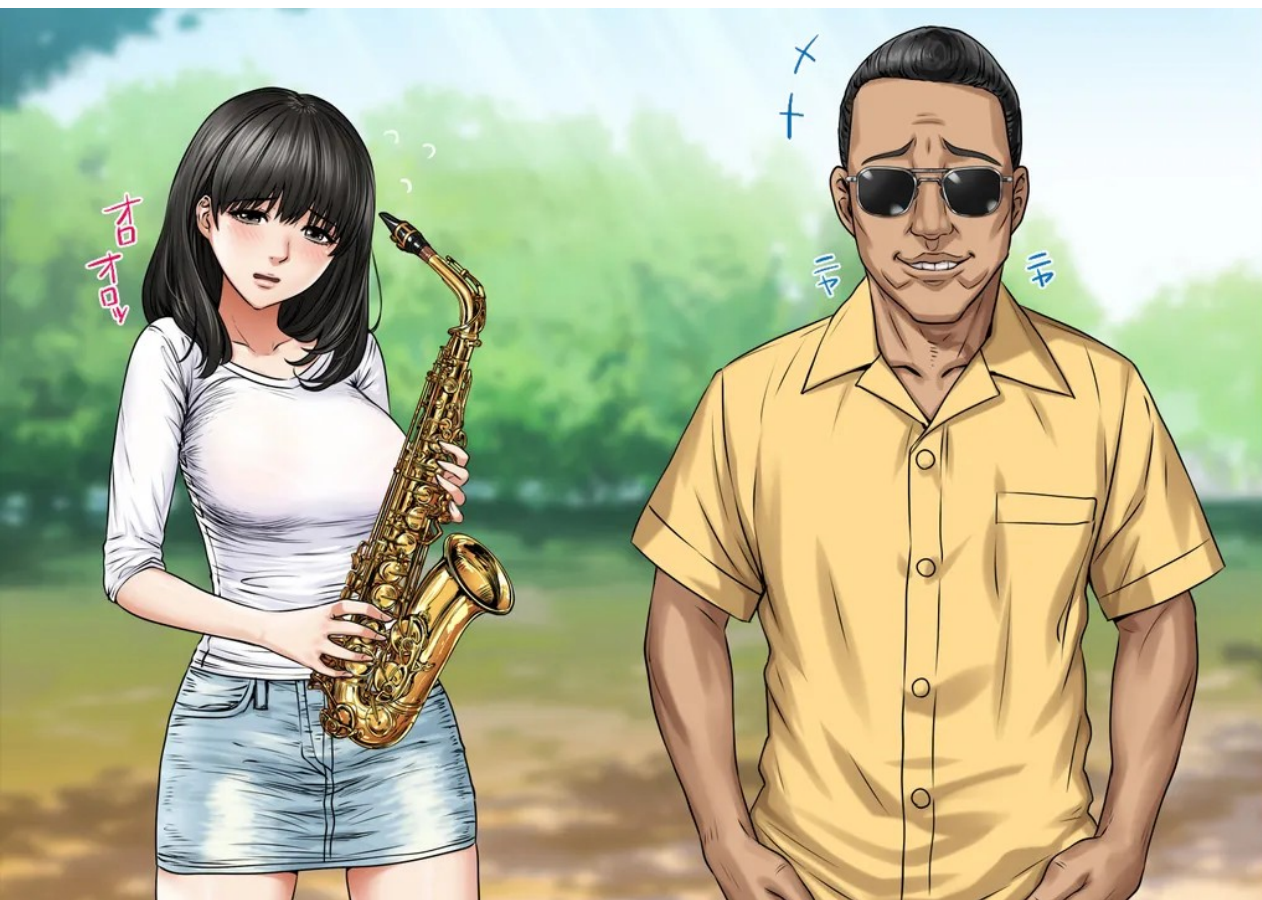


「いやいや、その才能を埋もれさせるのは勿体ない！
親御さんへの説得は俺も協力するから。……なあ？」
「え、でも……」

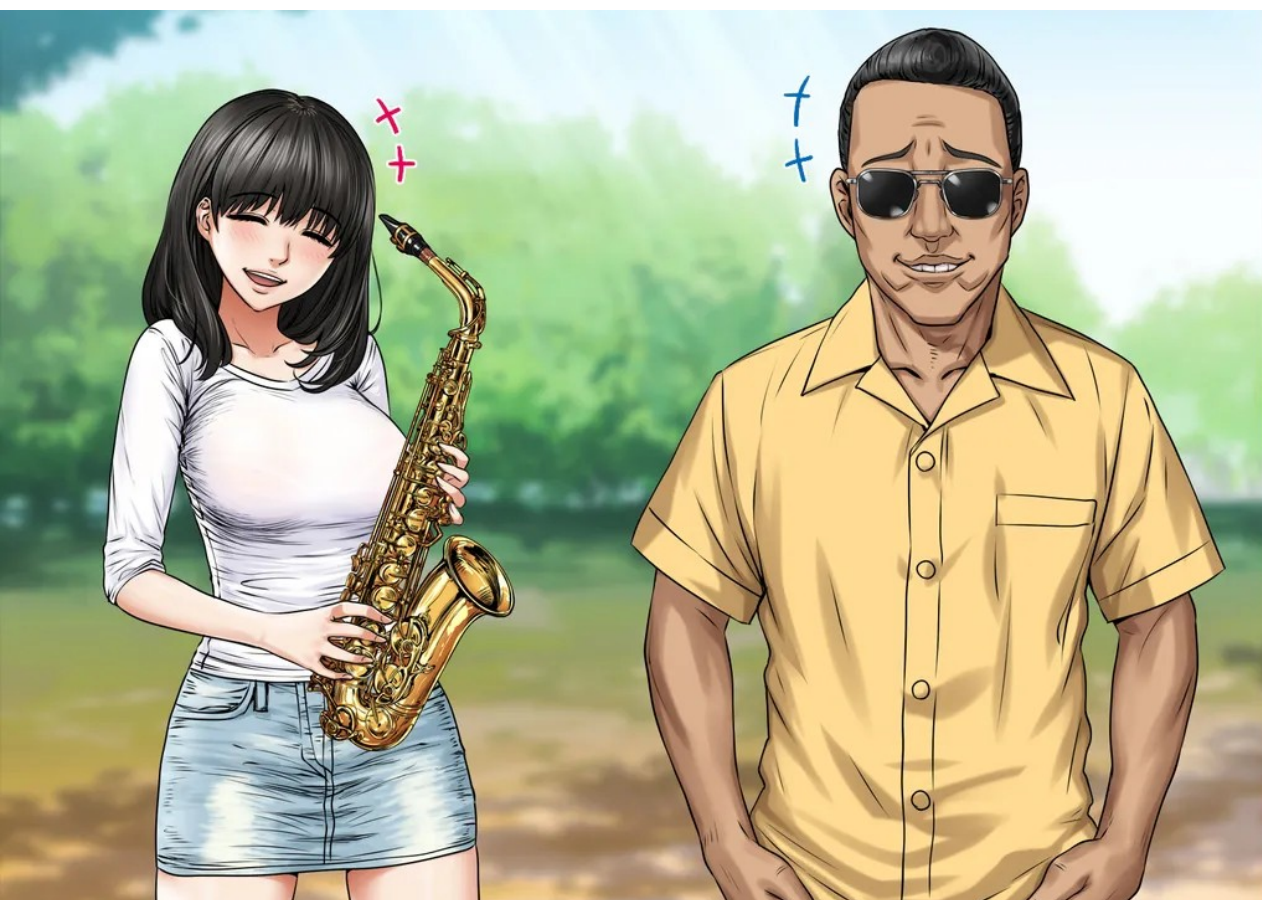
美樹の中でココロが揺らいでいた。
親と夢の二つが天秤にかけられてぐらぐら左右に傾く。



「う〜ん…じゃあ、ウチのスタジオがすぐそこなんだけど
一回そこで個人レッスン受けてみない？」
「スタジオが近くにあるんですか？」
（今まで気づかなかった…音楽スタジオなんてあったかな）」
「そうだよ、今まで気づかなかったのも無理ないか。
完全防音完備だから音漏れもないしね。」



「プロの指導を一度受けてみるのもいい機会でしょう？」
「あ、でも私…お金……」
「ああ…いらん、いらん。誘ったのはこっちだしね。
俺は君がやりたいかどうかを聞きたいんだ。」
指導だけでもという軽い言葉に、美樹の天秤が傾いた。



「それなら…ぜひ、スタジオに行ってみたいです。」
「あ、いい返事や！俺の指導は厳しいから覚悟してな？」
男がケラケラ笑うと、美樹はドキドキしながらも
「お手柔らかにお願いします。」と返した。

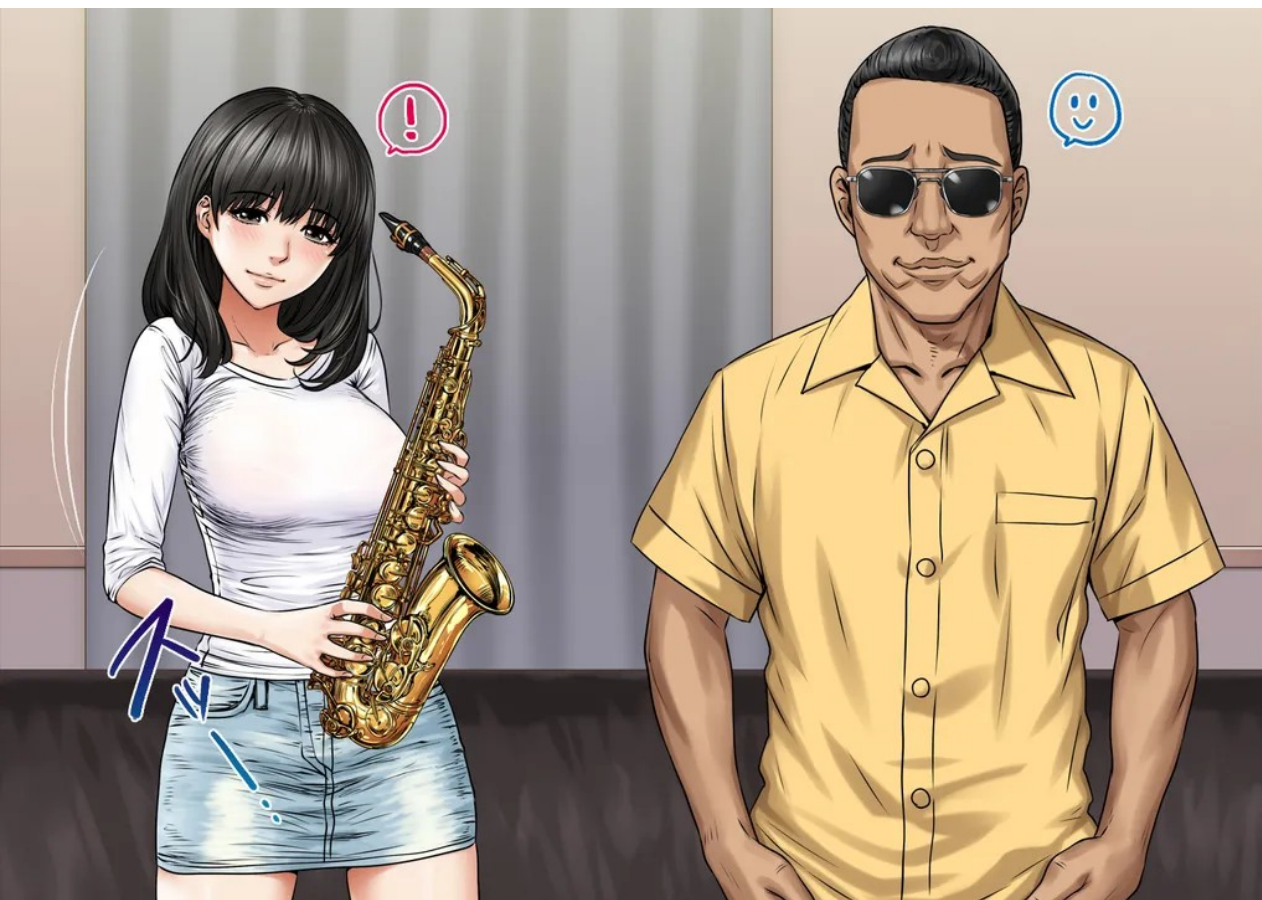


こうして美樹は、近くにあるというスタジオへ向かう……

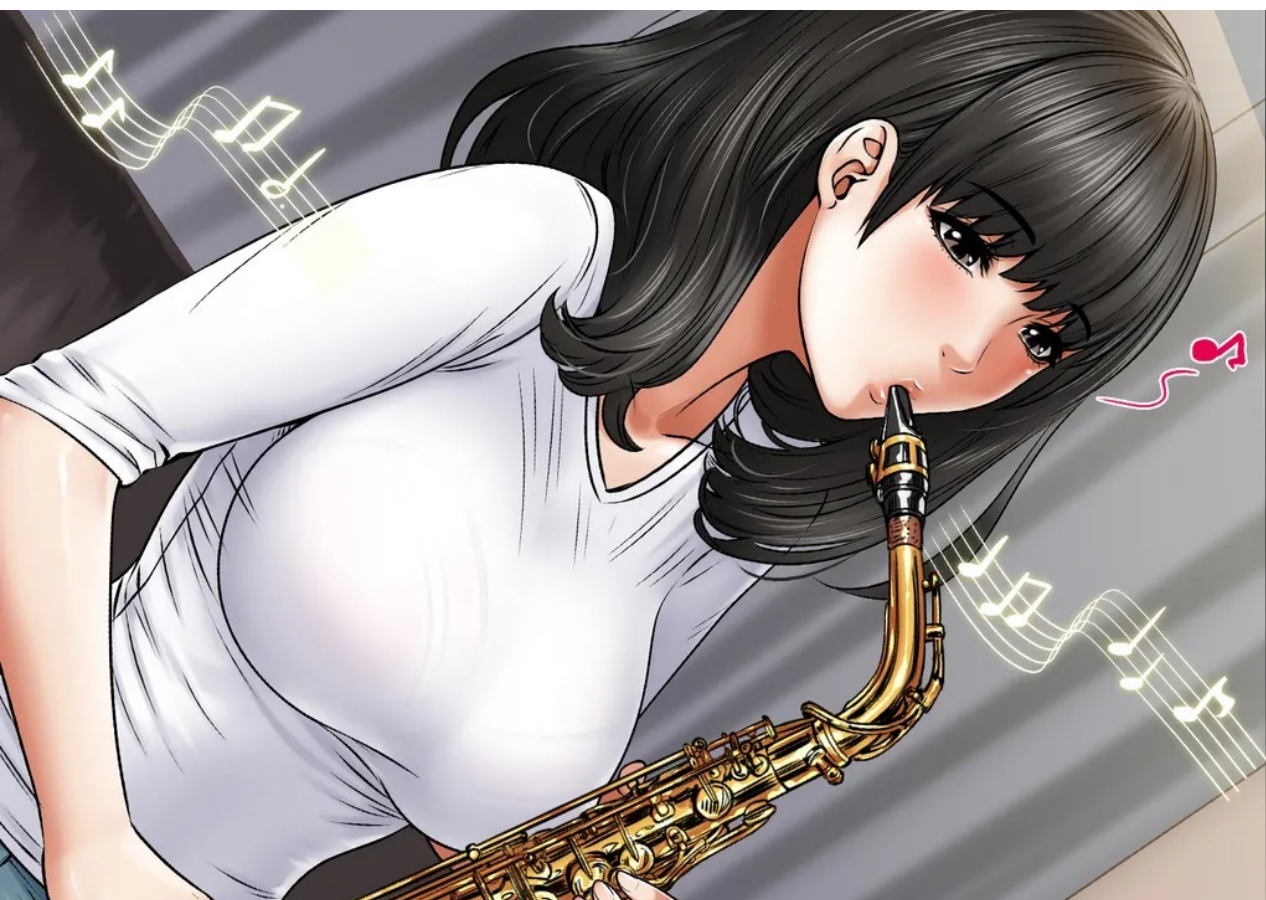
「ここがスタジオ…(こういう所は初めて来た)」
「まあ…緊張しないで、楽しんで。」

美樹がキヨロキヨロと部屋を見回していると、男が声をかける。
がしかし、美樹は初めての場所に興味津々。
視線があちこちに動き回った。





「よし、早速だけどレッスン開始しようか。」
「は、はい……よろしくお願ひします。」
「最初はとりあえず、好きに演奏してみてくださいよ。」
部屋の中央に美樹を立たせ、レッスンを開始させる。
自前のサククスを取り出し、緊張しながらも息を吸い込んだ。

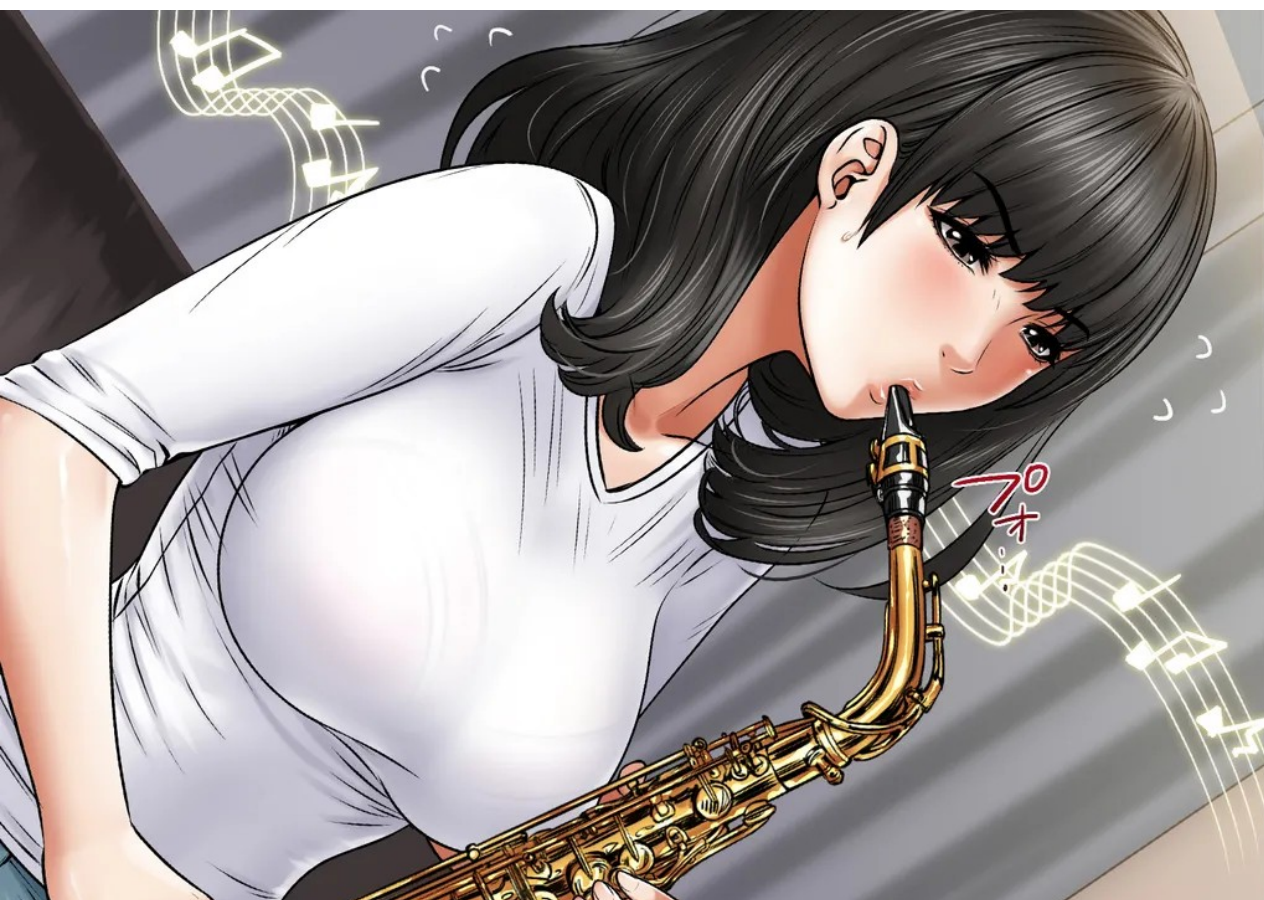


美樹の奏でるサクソフの音色が部屋中に響き渡った。
公園での聴こえ方と違い、なんだか不思議な感覚になる。
「……(外でやるのと全然違う。音がすごい鮮明に聴こえる)」
演奏をしながら、美樹は初めての感覚に胸をときめかせていた。

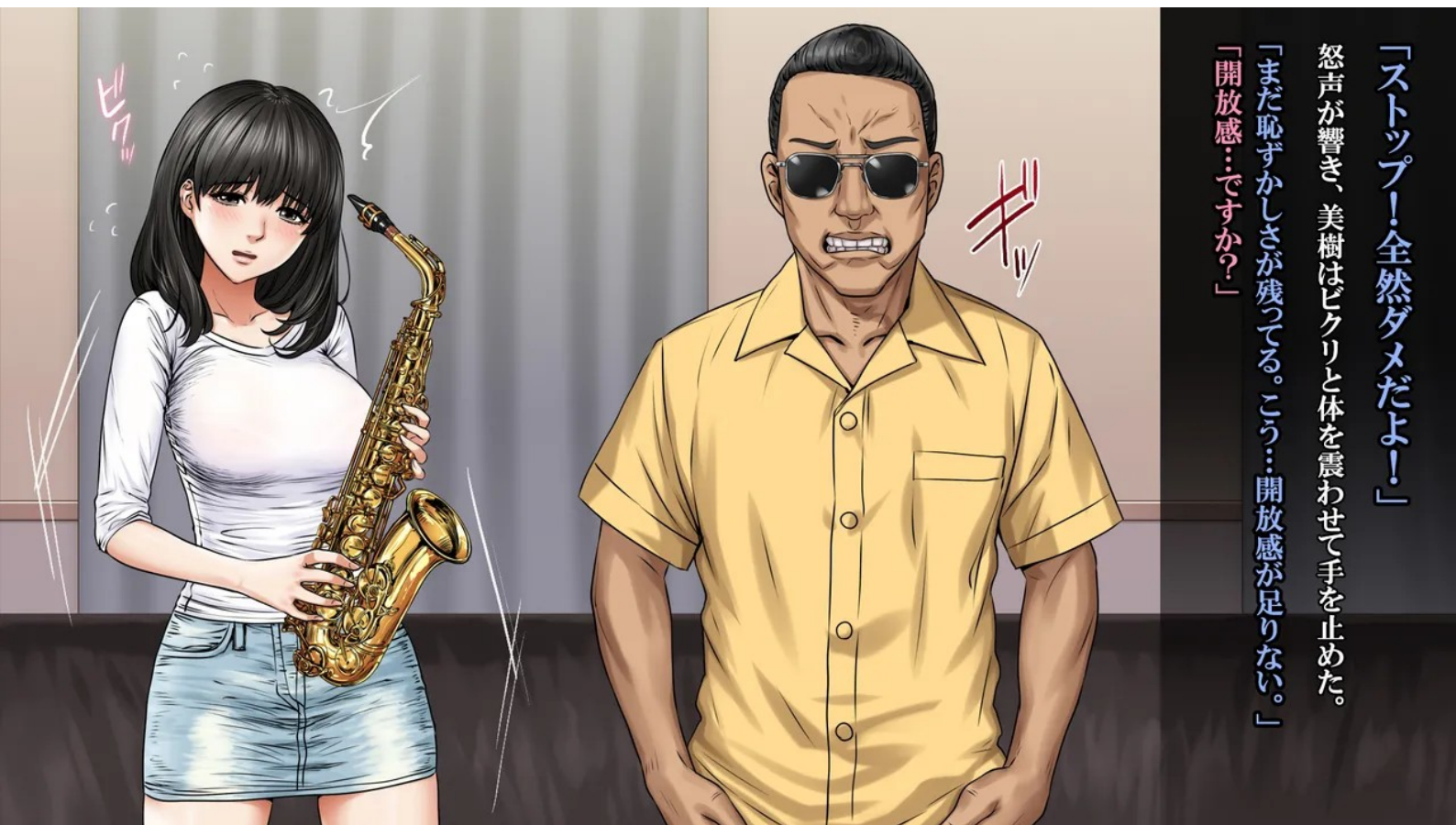


「音の伸びが悪いな。姿勢をもっと正して。」
「……ほ、はい。」

言われたように背をピンッと伸ばし、演奏を続ける。
今になってプロに見られているという事実には怖気つき始めた。



「全然ダメ。緊張で音が上ずってる。」
「……うっ……(思ったよりキツイ、かも……)」
「プロになったらもっと大勢の前で演奏するんだから
そんな探り探りの音じゃ、プロになれないよ。」
美樹は言葉に耳を傾けながら必死に演奏する。

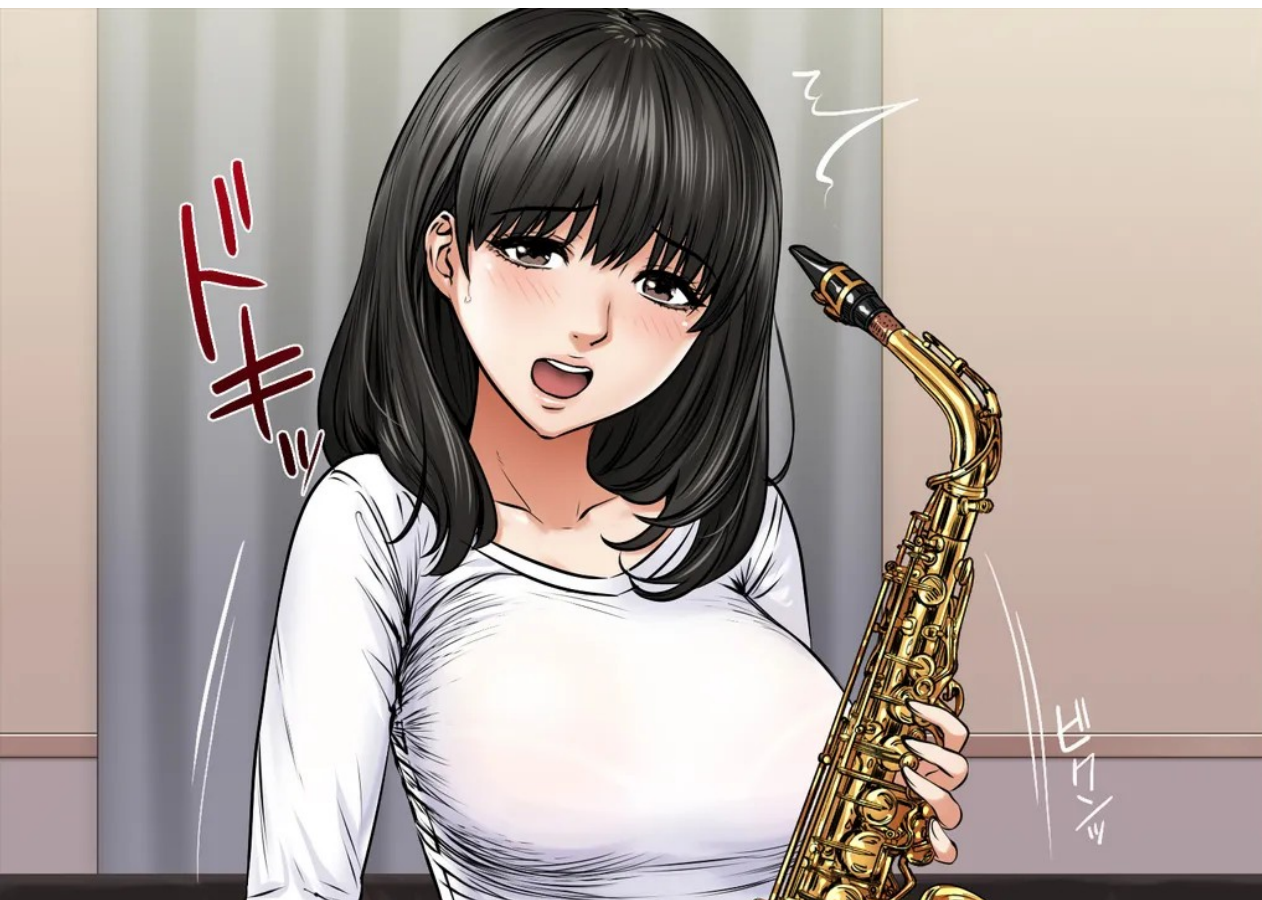


「ストップ！全然ダメだよ！」

怒声が響き、美樹はビクリと体を震わせて手を止めた。

「まだ恥ずかしさが残ってる。こう…開放感が足りない。」

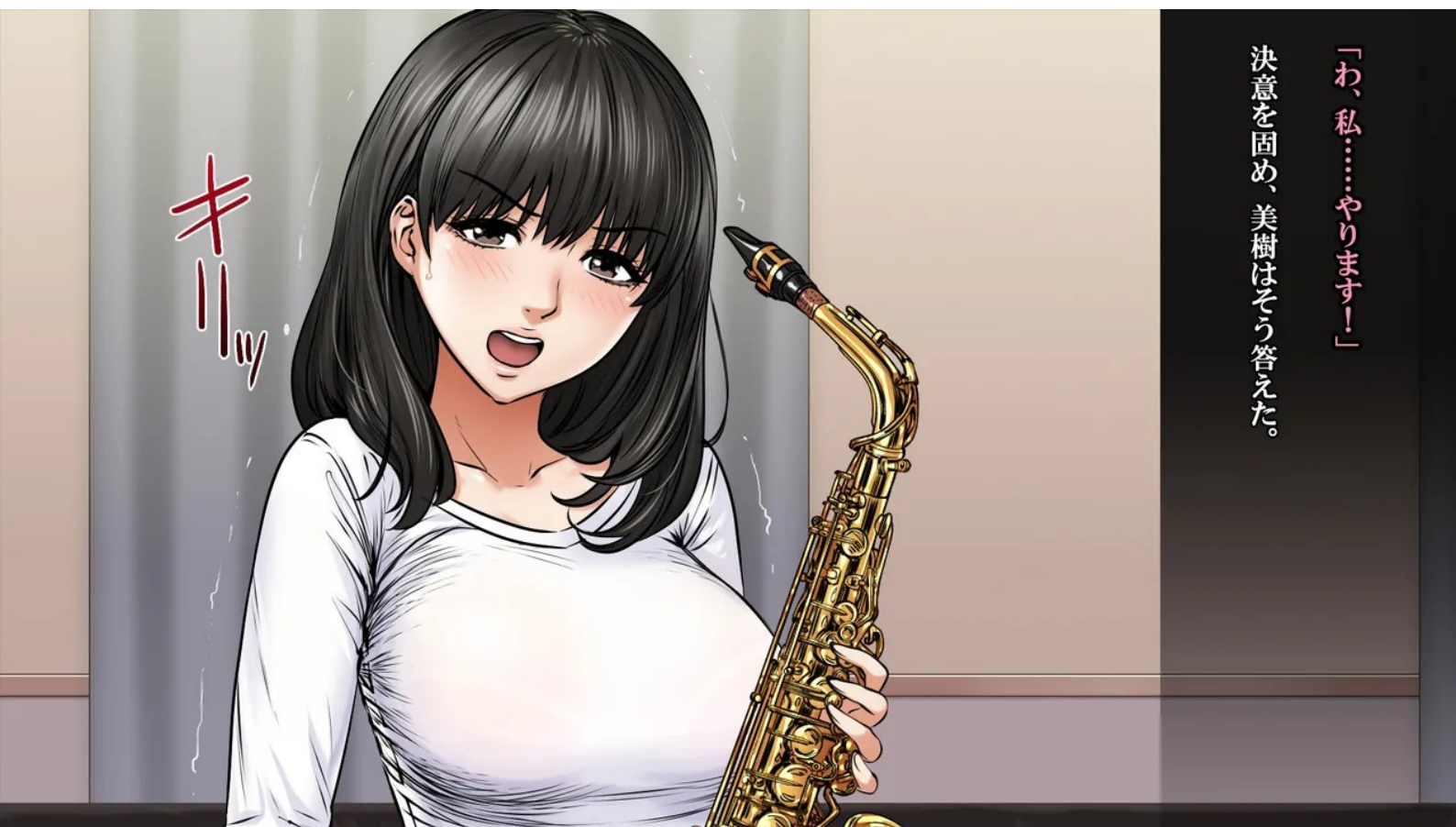
「開放感…ですか？」



「やっぱこれが一番かな。……………服を脱いで。」
「えっ……それはちょっと……………」
「何を恥ずかしがってるのさ。そういうところがダメだよ。
これはちゃんとしたレッスンなんだから。」
男の強い口調に美樹は言葉を呑み込んだ。



「幸い今日は休みで誰もいないし、まだマシな方なんだよ。普段はみんなもつと人のいる前でやってるからね。」
「そう…なんですか。」
（プロの世界って想像もつかないくらい厳しいんだ…）」
自分の思った以上の出来事に美樹はどンドン気圧されていく。しかし同時に、今プロに見てもらえる幸運を感じていた。



「わ、私……やります!」

決意を固め、美樹はそう答えた。



服を脱ぎ捨て、美樹は下着姿でサックスを吹いた。
「うっっっ……(やっぱり、恥ずかしい……)」

サングラスの奥から男の視線を感じる。

「……(中々いい女を見つけられたな)」

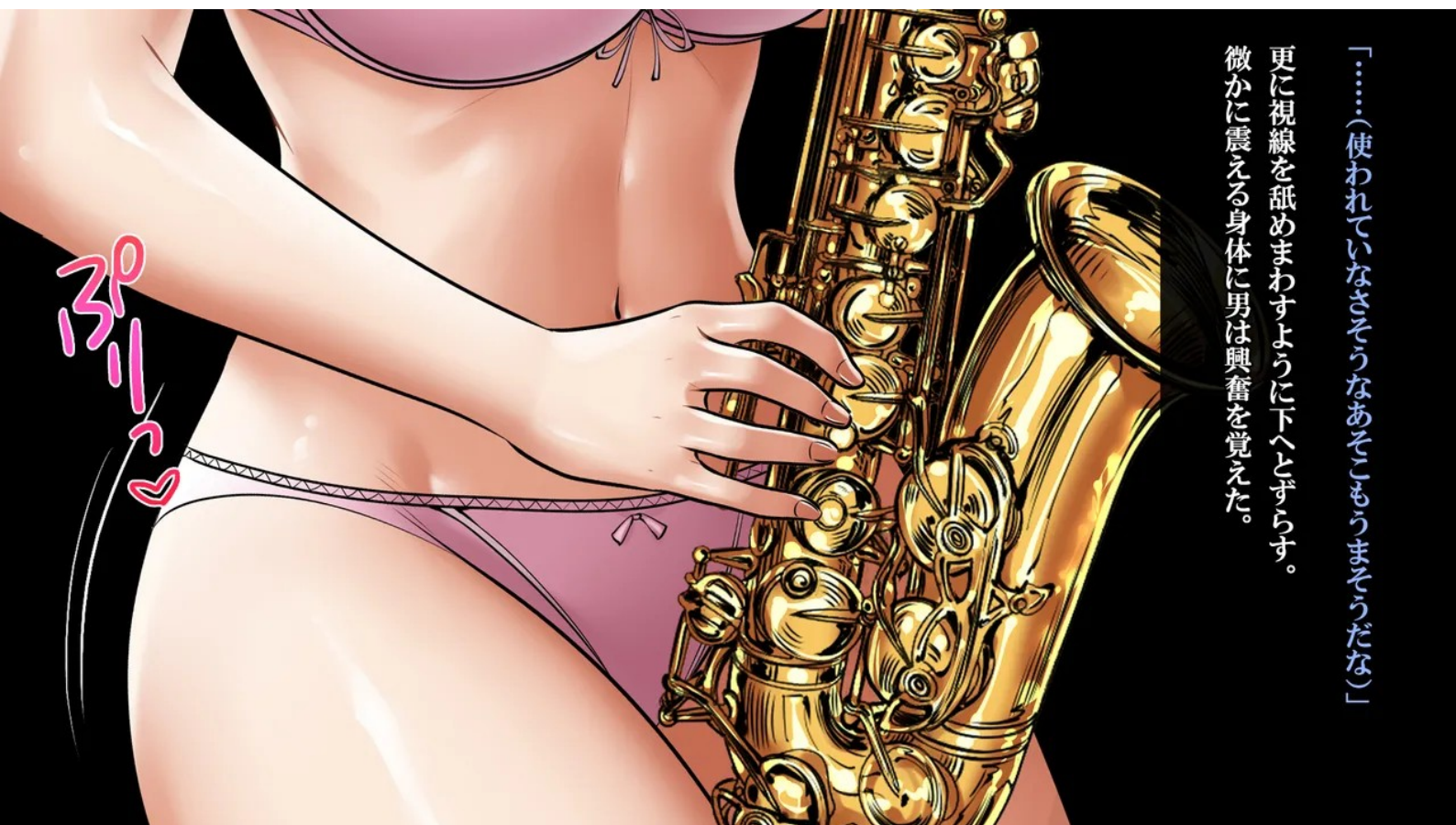
ニヤァ





「……(っ)っ、胸もでかくな」

可愛いピンクの下着に視線が集中する。



「……(使われていなさそうなあそこもうまさうだな)」

更に視線を舐めまわすように下へとずらす。

微かに震える身体に男は興奮を覚えた。



「……(すごい見られてる。でもこれはレッスンなんだよ、ね?)」
見られている羞恥心を感じながらも美樹はひたすらに
サクスを吹き続けた。



「まだ緊張が拭えないな。」
「……(うう…厳しいなあ……)」

男の不満そうな声に、美樹はさらに不安になる。
それが音になって響いているようだった。



「しょうがない。もう下着も脱いじゃおうか。」
「ええっ…!?!」

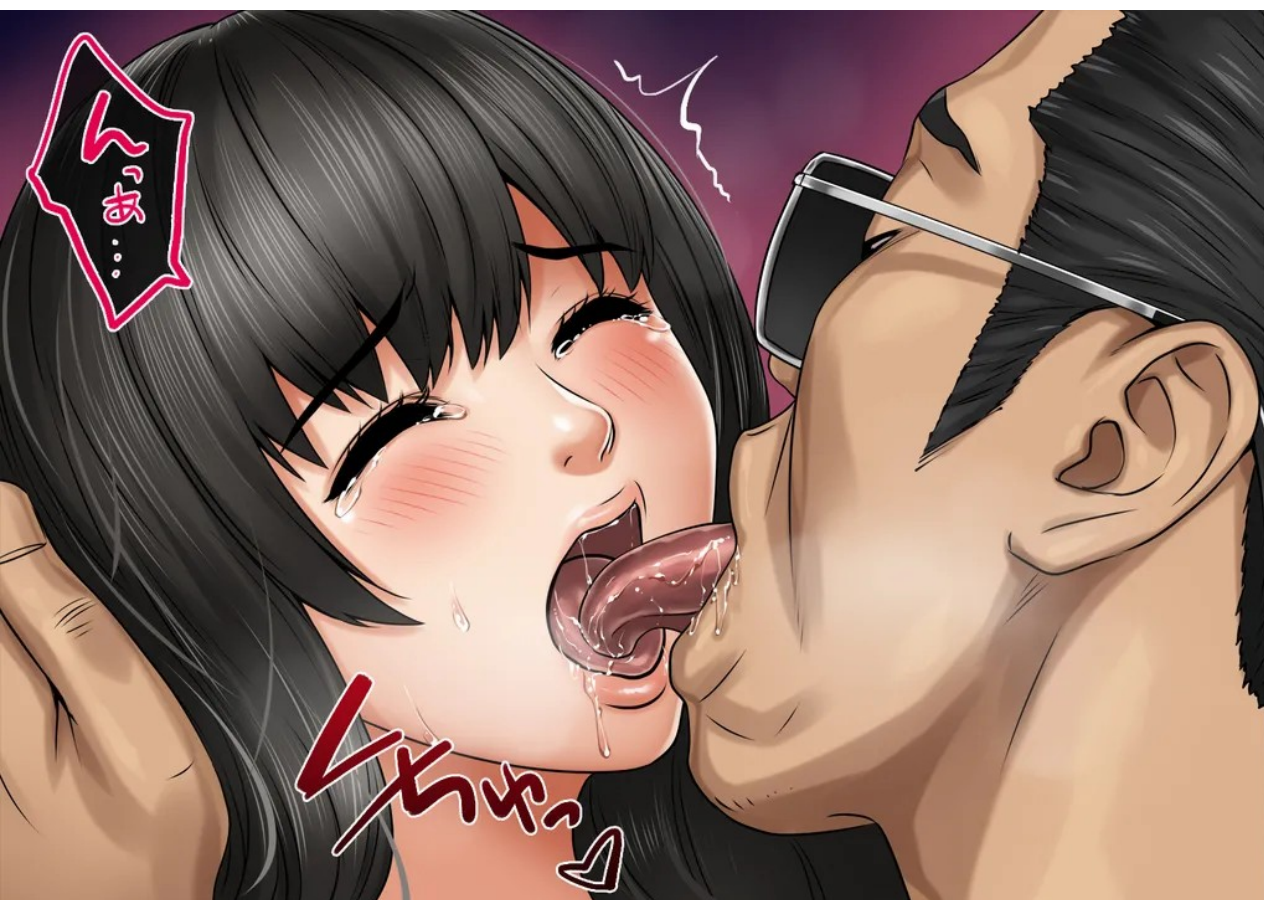
美樹はギョツとして演奏を止めた。
男はお構いなしに美樹の下着へ手を伸ばす。



「さあ、これで度胸付けていこうか。」
「ふえつ……(うそ、本当に裸…見られて…うづつ…)」
「大丈夫、大丈夫。俺はレッスンで見慣れてるから。」
そっぴいながら美樹の体に手を這わせる。



「ほら、しっかり演奏して。」
「んんっ……（恥ずかしすぎて演奏に集中できないよ……）」
「恥ずかしくてたら上手くならないよ。」
「はい……（集中…集中……っ）」



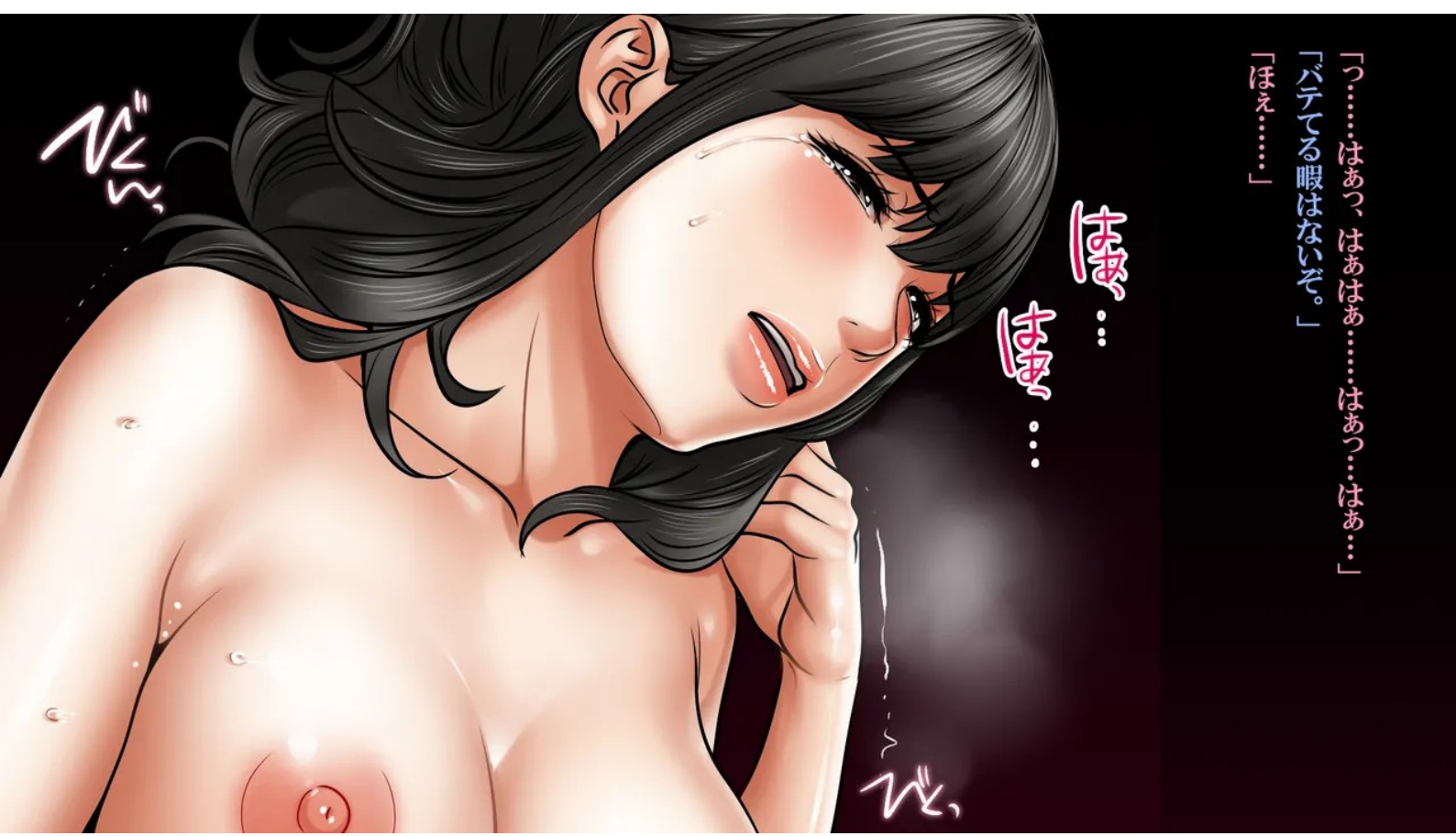
「ダメだね、呼吸がなっていない。
教えてあげるから口をあけて。」
男は無理やり美樹の頭を引き寄せると、ペロリと舌を絡めた。
突然のことに美樹は思わず目をグッとつぶる。

「っ……はあっ、はあはあ……はあっ……はあ……」
「バテてる暇はないぞ。」
「ほえ……」

はあ……
はあ……

びっ

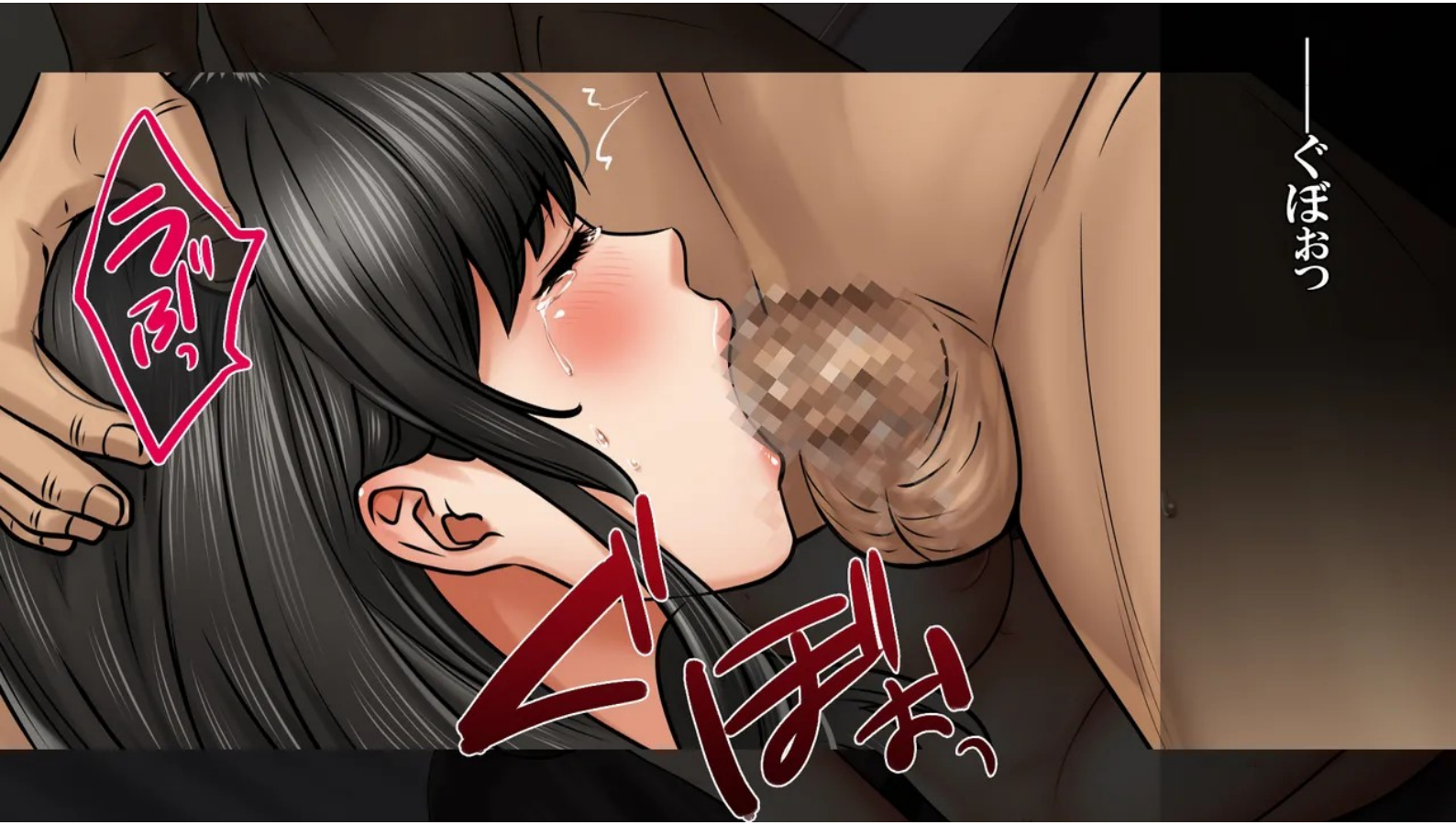
びっ



「上手く舌を使って舐める。」

初めてみた男性器に戸惑う暇もなく、顔を押し付けられる。むせかえる生臭い匂いにせき込みながら、舌で舐めた。





うん、
はい

はい

くぼおし



「うっうっ……ちゅっ、ちゅるっ……おいっ……」
「喉使え。おら、吸えって。」

喉奥まで肉棒を押し込まれ、せき込む。
しかし、休む暇もなく男は腰を動かしてくる。



「んっ……(ん)のんっ……(ん)っ……」
「はっっ、はっはっ……(ん)どっどっ……あーっ……んっ……」
美樹の喉に肉棒がささる。
荒々しく喉奥を犯され、息継ぎするのが必死だった。



「おふっ……中々呑み込みが早いな。」
「んっ、んっ……ちゅるるる……」
（口の中ですごいビクビクしてる……）
先走りの液をゴクリと飲み、言われた通りに吸っていると
肉棒がビクビクを脈を打ち出した。



「おつと...あぶねえ。出すトコだったぜ。」

「はあ...はあ...う...」

「次は横になれ。」

美樹の口から肉棒がにゆるると抜かれた。

不思議に思っていると、次の命令をされてソファァに倒される。



「なんだ、もうヌルヌルじゃないか。
ちんぽ舐めて興奮してたんだな。」
「ほっ、い……っ。」

男が肉棒を美樹のあそこに擦りつけると、そこはすでに
ヌルヌルになっていた。



はあ
はあ...

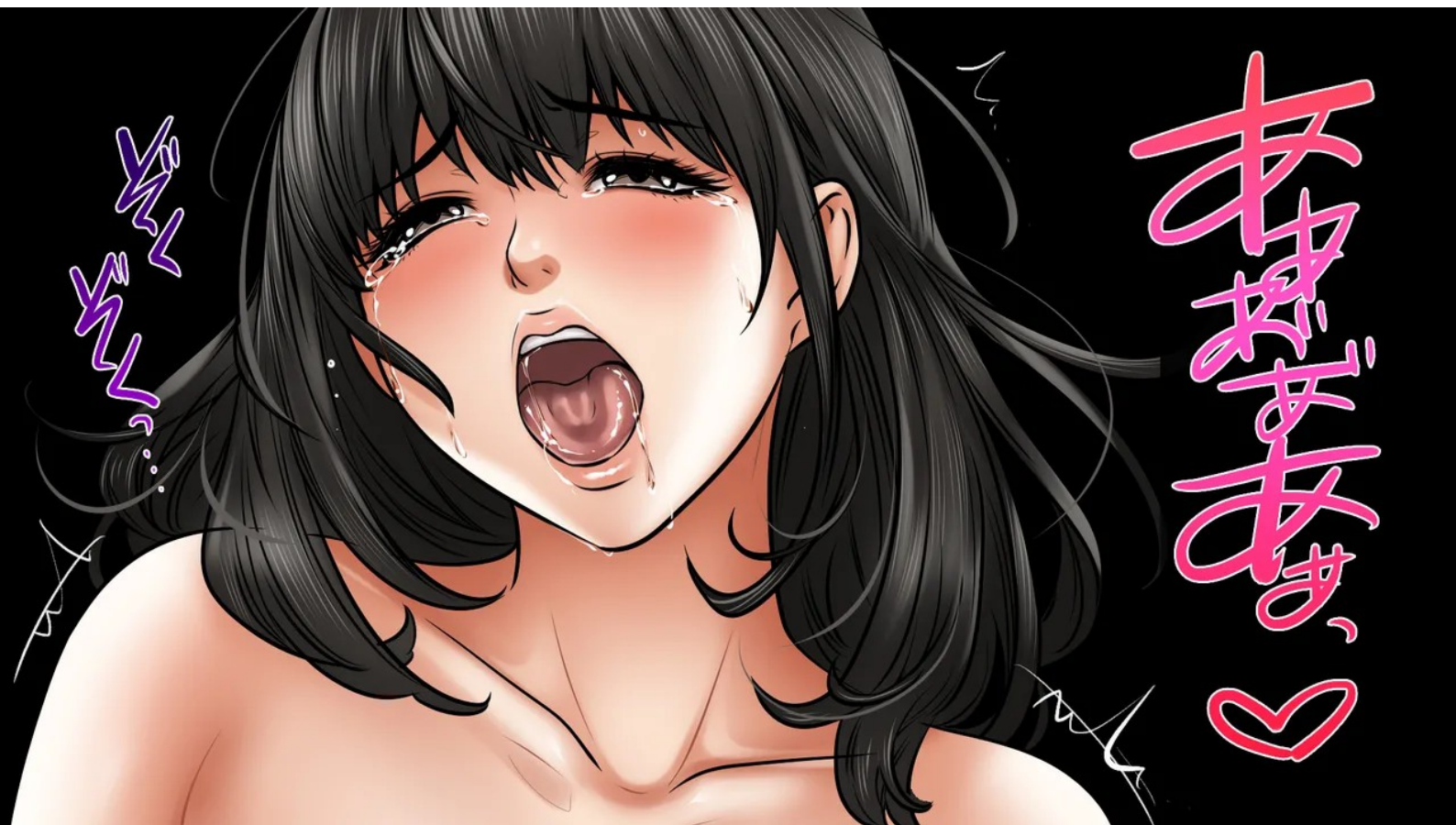
あれ…私、なんでこんなゴト、してるんだっけ——？

びん

びん



ちゅん.....



泣いて泣いて泣いて...

お母さま、
お母さま、
♡



「あぐっ…いたっ、あああ…挿つて……」
「おお、これは…いい具合だ。」
「待つて……動かない、でえっ……」
ズブズブと膣内へと入ってくる異物に美樹は悲鳴をあげる。



「流石…使われてないあその締めりは最高だな。」
「あつ、あんつ…なに、これっ…」

美樹の静止も聞かず、男は腰を動かす。
激しい動きからくる快感の刺激に、意識が飛びそうになった。

「ほら、自分で動いてみな。」
「あひっ…♡まっして、これさつきより奥にきて…る…っ。」

体位を変えられ、美樹はぶるっと身体をふるわせた。
子宮をつつく肉棒の感覚に力が抜けていく。





「まったくだらしがないな。」
「あんっ…はっ♡うごいちゃ、だめっ…れす……」
下から突き上げられ、美樹は声をあげた。



「ココがいいんだろ？」

「あひいっん…♡あぁっ、そこお…っ♡♡」

グリグリと美樹のいいトロロに当たるようせめる。
その度に甘い声があがり、膣内を締め上げた。

あひいっん

あぁっ

あぁっ♡

あひいっん

あぁっ

あぁっ♡♡



「安心しろ、ちゃんと面倒は見てやるよ。」
「あああつ……♡そこ、やああつ、んん……♡♡♡」
「俺のセブとしてなッ」
「セブ……ッ……♡♡」



口では必死に男を罵るものの、美樹の表情はオンナだった。
ナカを突き上げられる度、快楽に涎が垂れる。

「ほら、もっとナカ締めろっ！」
「あっ、あぁっ♡あんあんあんっ…♡♡♡」



「気持ちいいんだろ？ほら、言わないとやめるぞっ」
「あつん♡…やあつ…やめちや、りやめ……え
いっ…ですう♡……気持ち、いいすっ♡♡」
男のピストンが緩やかになり、美樹は慌てて声をあげた。
そして自ら腰をグイグイといい所に擦れるように動かす。



「あああああああつ——♡」



「おっ…おっ……射精るっ……」
グッと最後に最奥を一突きした。



「はあはあはあっ……」
「あっ……あう……はあはあっ……あ……」

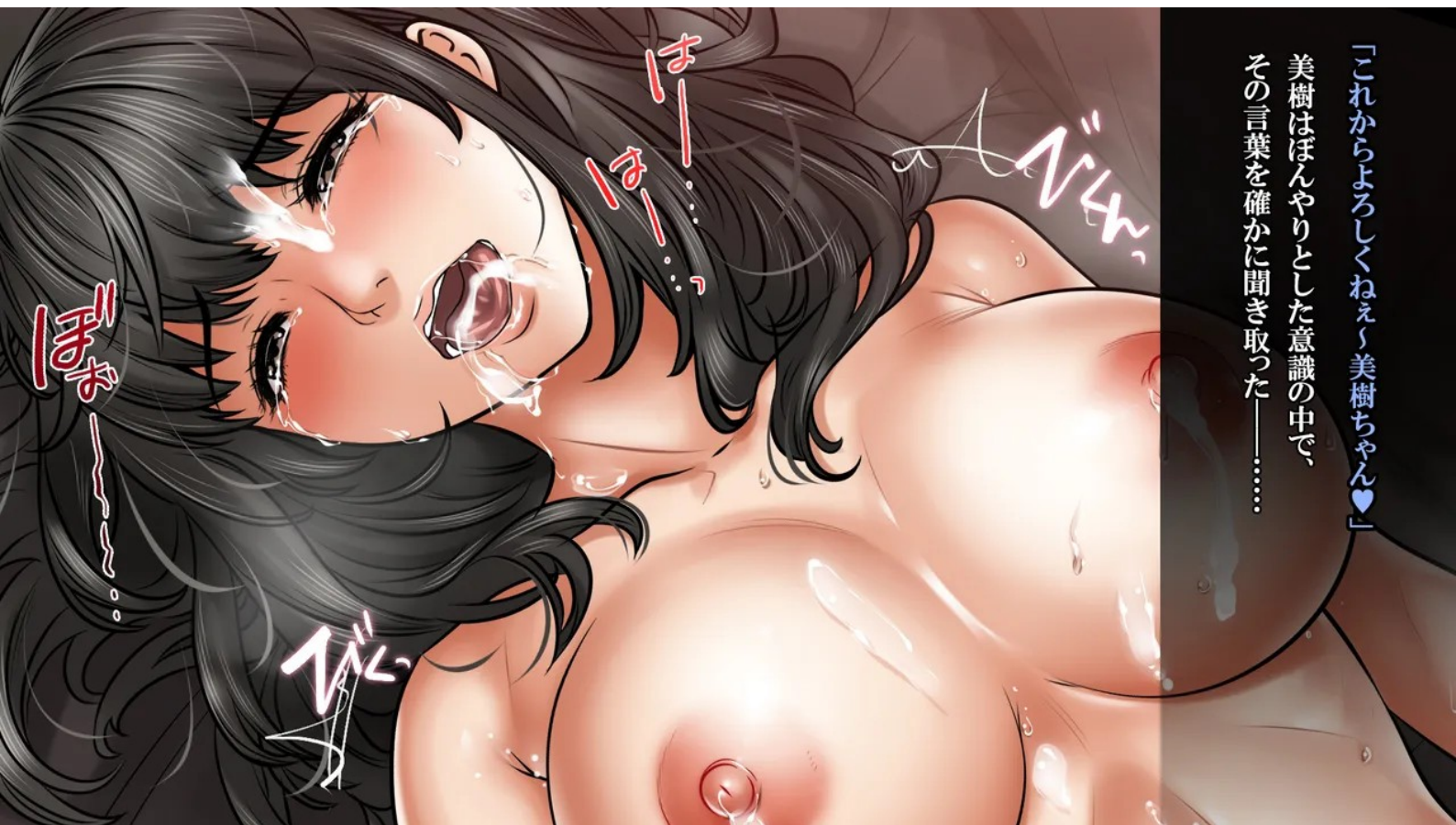
男は肉棒を引き抜き、自らの手でしごき始める。
美樹は絶頂の勢いにうまく呼吸ができず、必死に息をした。



ゴッ——...



「あつー、うう……」
「ちよつと飛ばしすぎたか。まあ、こんなもんだろ。」
精液で身体を汚した美樹を見ながら、男はそう呟く。
体中が痙攣しているようにビクビクと軽く震えていた。



「これからよろしくねえ、美樹ちゃん♥」
美樹はほんやりとした意識の中で、
その言葉を確かに聞き取った……



氏名
KONNO MIKI
紺野 美樹

誕生日 4/17

BWH 88/57/84

バストカップ F

血液型 A

職業 学生

性格
 努力家で人のいうことを丁寧に聞いてあげる素直な性格。少々真面目な部分や他人の目を気にする点もあるのだが、好きなものには情熱的で行動派。

シチュエーション

進学校に通う優等生の美樹は、親の圧力から幼い頃から勉学に励み、努力を続けてきた。しかし、サクソと出会ってからその魅力に惹かれ、没頭し、成績がおろぞかになっていってしまい、両親と衝突。愛用のサクソを手に、家を飛び出してしまう。その先で出会った、音楽関係の仕事をしているという男の言葉に乗せられて、ホイホイとついていってしまう。人生経験の浅い美樹は、男の言われるがまま……

**レッスンの為だと服を脱がされ、下着を脱がされ…
 そして最後には肉棒を奥深くまで挿入される♥♥**



一人称 私

二人称 貴方

家族構成
 父親・母親
 悪癖をこぼす為のサボテン

好きなもの
 サクソ (音楽系)
 チーズフォンデュ
 音楽好きな人
 ケンニ♥

嫌いなもの
 勉強 (でもやる)
 めんたいに強要する人
 音痴め♥



ステータス

【体力】
 もともとスポーツ万能型で、力も女性平均値よりやや高め。なにより、楽器をしているせいか、肺活量がすごく、息が長く続く。

【持久力】
 運動ができる分、持久力も平均よりやや高め。しかし、意外と継続的な運動をするとすぐに肩が凝ったりして筋肉痛になる傾向がある。

【知識力】
 平均的。学力は親に言われて勉強している為に悪くはない。でも、音楽に没頭するあまりに成績が落ち気味になっているのが悩み。

【エロ度・テクニク♥】
 勉強・音楽とやってきたため、男性関係には疎く自分に好意を寄せている人に対しては大分鈍い。ただ、相手が自分をエッチな目でみているのはすこし敏感で、少々男性に対する恐怖みだいなものもある。エッチの知識は聴し本から…

